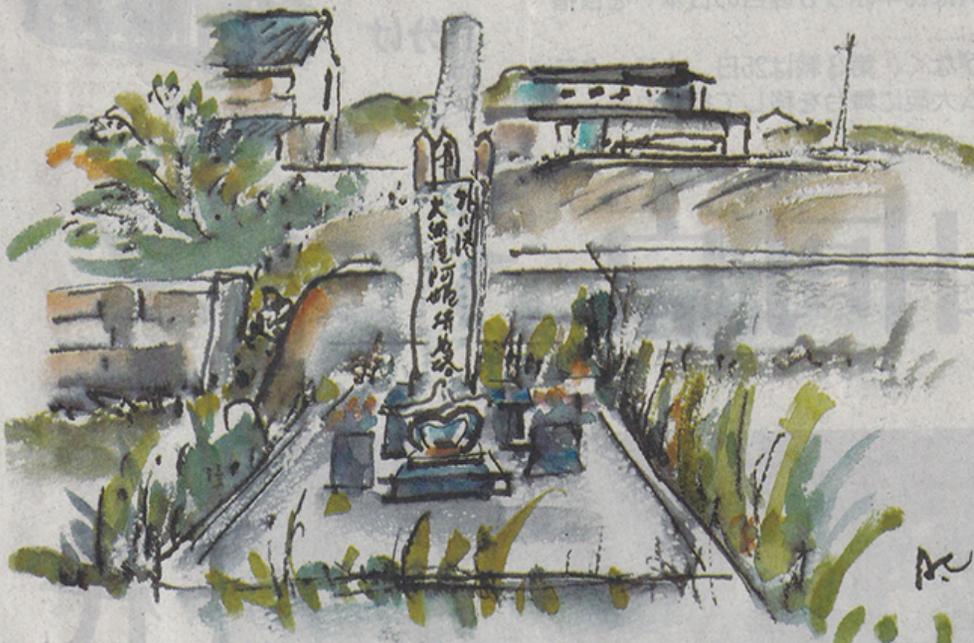


「外川港 大納屋阿姫供養塔」のスケッチ



# 外川浦に残る大納屋阿姫の悲話

絵と文・熱田親憲 題字・熱田素華

紀伊・房総

## くろしお物語

◇28◇

千葉県銚子市・外川浦の西浜にはイワシ漁で「外川千軒」と言われるほど繁盛した港がある。外川港築港の崎山治郎右衛門年代記によると、イワシ漁にまつわる悲話が伝えられている。

紀州日高郡湯浅村由良に生まれた阿姫(おさつ)は18、19歳頃の1768(明和5)年、湯浅村から銚子に来た佐兵衛を慕って、男でないと漁船に乗れないため男装して、徒歩で

銚子の向かい側の波崎(茨城県神栖市)にたどりの着いた。幸い体格は良いし、男衆がかなわぬほどだった。ある晩、入浴姿を見られた阿姫は女性とのうわさが立ち、漁船に乗れなくなった。そのうち縁者の世話で、外川浦の大納屋へ漁夫兼炊事婦(かしき)として入った阿姫は掃除洗濯、針仕事など一生懸命働いた。

銚子の向かい側の波崎(茨城県神栖市)にたどりの着いた。幸い体格は良いし、男衆がかなわぬほどだった。ある晩、入浴姿を見られた阿姫は女性とのうわさが立ち、漁船に乗れなくなった。そのうち縁者の世話で、外川浦の大納屋へ漁夫兼炊事婦(かしき)として入った阿姫は掃除洗濯、針仕事など一生懸命働いた。

なら返しても良い」と言われ、彼女は身体に網を巻き付け、残りを頭にのせて8キロの道のりを担いで帰った。外川浦は久しぶりのイワシの大漁に酔いしれた。しかし「阿姫は化けもの」と人々のうわさのほり、夫の治郎右衛門は網元を畳んで紀州に帰ってしまった。残された彼女は孤独になり、泥酔し、夜中に

## 報われぬ孤独感に涙

創業者から三代目の大納屋治郎右衛門の妻が病死し、後妻となった阿姫は純情で気丈に毎日懸命に働いた。しかしイワシの不漁が続き、大納屋は漁網を賣りに入れてしまった。

人家をたたくなど、ついに精神のバランスを失う。浦人は阿姫をもてあまし、だまして浜に誘い、酒を飲ませて倒れている阿姫を大桶に詰めて海に流してしまった。1802(享和2)年3月8日、彼女が54歳頃であった。その後、イワシの不漁や海難事故が起き、浦人は阿姫の夕夕判。「ひとりで持てる

ある日、大納屋が和山からイワシの群を発見し出漁の準備に入った。彼女は質屋に出向いて番頭に直談判。「ひとりで持てる

判。「ひとりで持てる